ナイスの視線で、日常の楽しみをお届けする、西成発の地域情報誌

Takefree!

なび

7月号
vol. 137

「ラフなプレゼント」
天下茶屋2丁目付近にて撮影

特集

にしなりもん

特集

にしなりもん

西成にもまだまだ発掘されていない文化資源・社会資源は存在するはず。これら西成産のモノやコトを「にしなりもん」と名づけ、その由来やエピソードを辿っていきます。

皮革のまちを求めて③

西成の地場産業である皮革製造業、なかでも製靴業を中心に在りし日の街の姿を追いかけていく本シリーズ。今回取材した西岡丈夫（たけお）さんは浪速区に生まれ西成区で育った甲革（アッパー）の職人。齢80の方の人生を後ろからついて回るような感覚でお話をうかがった。

皮革のまちと西岡少年

西岡さんは1938（昭和13）年に浪速区で生まれた。7歳の頃あの大阪大空襲（本誌120号も参照）から逃れるために、2歳上の兄と滋賀県の生源寺（比叡山のふもと日吉神社の近く）に1年ほど疎開した。戦争から帰還した父が疎開先に迎えに来てくれて帰ったのは、生家ではなく、西成区の南開にあった平屋建ての長屋だった。

西成での新しい生活のために父は「ブローカー」のような仕事に携わった。物価統制令のもと、浪速区の皮革製造会社の知人を通じて革のベルトを融通してもらい販売した。その後、父は大国町にあった「宮前」という革屋（※1）から不要な革の屑や「床（トコ）」を分けてもらい、それらで「タマ」（※2）を作って販売した。当時の大国町には宮前のような革屋がたくさんあった。西岡さんは仕事の手伝いで職人の仕事場に出入りしたので、靴づくりの仕事をよく見て覚えた。やがて、西岡さんは製造に携わるようになる。

当時の「職人」の生き様がそうだったのか、西岡さんはいろんな現場を転々とした。その理由はややこしかった。母親が41歳の若さで亡くなったとき、西岡さんは中学2年生。やがて父親に後妻ができると、その人と折り合いがつかなくなり、住み込みで働けるところを探した。次に働きに行った甲革師・中辻さんのところでも親方夫婦のいざこざがあった。旦那の浮気や遊びのせいでよく喧嘩をするので、西岡さんは南開の実家に戻った。次の働き先を父に相談すると、浪速区芦原の甲革師・島さんを紹介してくれた。19歳になっていた西岡さんはすでに一人前に仕事ができるようになっていたが、「礼奉公」という名目でなかなか独立を認めてくれなかったそうである。

工房にて

一人前の職人として

「礼奉公」が終わり、一人前の甲革師として独立した頃の主な取引先は竜田工業（西成区花園）と杉本商店（同区長橋）だった。竜田工業の仕事では「手製」用の甲革を作った。西成区の南開の自宅に材料が届けられると、粗断ちされた革を整形して漉く。ふつう甲革師の奥さんが革の端を折る「耳折り」やゴム糊の糊付けなどの下手間を担当し、甲革師はそれにミシンをかけて甲革を組み立てていく。歩合制なのでとにかく足数を上げるために、夜遅くまで働いた。

工賃は、手製（十分製（じゅうぶせい））に使う甲革は昭和56年当時の価格で一足1250円、他の九分製（くぶせい）の仕事では一足900円。底付けの

年季の入った腕ミシン

手製靴の踏まずが「食っている」部分

仕方で値段が変わった。西岡さんが言う「手製」とは、底付けをすべて手で縫う仕方（十分製）でもっとも高価な製法になる。「九分製」「七分製」と手縫いの割合が減っていき、値段もリーズナブルになる。甲革は底付けの作業にはあまり関わらないが、メーカーはそれぞれの製法や値段に見合った素材を用意し、甲革師には仕事の精度を求めることになる。ご自身の靴（写真参照）を持ってきて手製ならではの底付けの細工を教えてくれた。

「これはトロージャン（ブランド名）の手製でね。踏まず（土踏まず）が食ってますやろ。ここは出し（ミシン縫い）をかけれないから、手縫いなんです。今は踏まずにスポンジを入れてますがね、それを入れないんです。ピタッと食いつくから。」

写真のように、靴の輪郭をなぞるステッチが、土踏まずの部分で内側に入り込み、甲革と底革の間に潜り込んでいる（「食う」）。土踏まずを支える形なので、吸い着くような履き心地が得られるそうだ。ここには機械の針が入らないので手縫いでやるしかない。「そやから、アッパーの革もたくさん要りますわ」。竜田工業の手製靴は「トロージャン」というブランドで全国の大丸百貨店に納められていたほどなので、かなりの品質が求められていたのであろう。西岡さんは、年を追うごとに「七分製」「九分製」「手製」の甲革を任されるようになった。このキャリアが甲革師としての腕の確かさを裏付けている。

手縫いから圧着へ

杉本商店は、西岡さんが取引を始めた頃にはマッケイ製法で靴を作っていた。この製法による機械縫いは「アリアン」と呼ばれた（※3）。地元には底付けの機械縫いだけをするお店もたくさんあり、杉本商店の靴もこれらのお店に出していた。現在、底付けの機械縫いをしてくれるお店は西成でも稀少な存在である。

九分製や手製など職人の手で作業しているときは足数が上がらないので、靴は取り合いになった。「そやから親方も強かったですわ。みんな仕入れに来て。今まで来ているところには売るけれども、飛び込みの者にはぜんぜん。品物がなくて取り合いでした。職人さんも31日まで仕事してました」。永田さんも同じことを言っていた（本誌129号）。

西岡さんの記憶によると、大阪万博の前後で世の中の景色がすっかり変わってしまった。靴づくりの現場ではゴム糊による圧着製法の普及となって現れた。

西岡さんがつくった靴

時流に合わせて杉本商店でもゴム底のカジュアル靴に切り換えた。圧着製法により靴の生産量は向上し、それと共に職人の待遇もこれまでのようにはいかなくなる。西岡さんはこんなエピソードを披露してくれた。

生産量が増えて一足の単価が下がることを嫌って、職人のなかにはあえて数を上げない者が少なくなかった。まさに「サボタージュ」、職人たちの戦術だ。しかし西岡さんは与することなく、職人仲間の牽制をうけながらも番頭さんからの多少無理な注文も引き受けた。「…値段の交渉もしない。社長もそれをわかって、向こう（職人）が嫌がる仕事を持ってきて、『これできるかぁ』って。で、『しますよ』と引き受けて仕事したら、向こうに払っている以上に手間賃くれます。やっぱり貢献しているというのを認めてくれるからね。やりがいありますわ」。

西岡丈夫さん

セブンシューズ

現在、西岡さんは週2回、浪速区大国町の材料屋「㈱岡山忠商店」に通勤し、その他は阿倍野区のご自宅に構える工房兼店舗で作業している。お店の名前は「セブンシューズ」。工房内の機械や材料とともにブランド名も杉本商店から引き継いだ。「せっかくやからその名前でしようかと言ったら、社長が『いいよ』と言ってくれた」。杉本商店の社長とは、仕事の関係がなくなっても、懇意にされているそうだ。

いまは鞄の修理も手がけている。ある日、客がヴィトンの鞄を持ってきた。押し入れに入れて大切に保管していたが、久しぶりに取り出すと、気候のせいか裏の合皮が劣化してベトベトしている。西岡さんは近くの修理店の半額で引き受けた。すると、口コミで評判が広がり、修理の持ち込みが増えて毎日忙しくされているようだった。

7 shoes（セブンシューズ）

西岡さんのように甲革師としてキャリアを積んできた職人、また永田さん（本誌129号）のような現場の管理職。靴を作るという仕事を通じて、あちこちにネットワークを広げていく職人たちの軌跡を編むように「靴のまち」という地場が築かれてきた。そんな街の姿を夢想する今回の取材であった。

※1 靴の原料・資材・部品となる、たとえば靴や草履の底になる「厚物」を製造・販売していた。「原料屋」とも言う。

※2 靴の爪先や踵に入れる補強材。「先タマ」「腰タマ」などと呼ぶ。

※3 マッケイ製法とは革靴の底付け方法の一つ。日本にこの製法が導入された1897（明治30）年頃、「アリアンズ」という底付けの機械がドイツから輸入され普及した。以来、マッケイ製法の機械縫いのことを「アリアン」と呼ぶようになった。

取材協力：田中僚子（西成製靴塾講師）
文責：若松司

地域こども

応援団

第14回

子育てに取り組む人・団体・施設を紹介して、子どもを支えるネットワークをどんどん広げていきます！

旧今小サイン

なんやかんややってるで！ 旧今宮小の作業場

今回紹介するのは、大阪市の文化事業であるブレーカープロジェクトが、現在は廃校になった今宮小学校を活用して取り組む、地域に開かれた創造の場づくりです。

美術家・きむらとしろうじんじんさんと、2015年からスタートし小学校に残る陶芸窯や倉庫、学習園、廃材など「あるものを活かす」をコンセプトに、誰もが立ち寄れる作業場として定期的にオープンしています。未就学の子どもから80歳代のお年寄りまで幅広い世代の参加者があるそうです。

なんやかんや

● 陶芸作業

まだ廃校になる前に運動場の体育倉庫の片隅に忘れ去られた陶芸窯を発見したことが「作業場」の活動のきっかけとなったそうです。この窯との出会いにより「西成の土を焼いてみる！」が始まりました。周辺の工事現場でもらった粘土や西成区内で集めた土を使ったり、廃材を燃やした灰を釉薬に使ったりといった焼きものに取り組んでいます。最近の全自動の陶芸窯と違って、作業場の窯は火入れから焼き上がりまでの微妙な温度を手で調整する必要があります。ちょうど私が参加した日は、窯に火を入れた当日で朝から夕方までかけて焼き上げ、次回の作業場開催日に窯から取り出すそうです。

(左)陶芸作業でつくった焼き物(中上)色んな人が参加してます(中下)黙々と削ってるうちに・・・(右上)リヤカーに薪ストーブでお湯を沸かす(右下)学習園を利用した畑作業

● 畑作業

小学校時代の学習園を利用して畑作業をしています。まずは生ゴミや落ち葉を堆肥に土を耕すことから始まり、出来た作物から種を採取して次の栽培に利用するなど、化学肥料や農薬などを使わないという方針で実験的に取り組んでいるようです。さらに野菜のへたから芽が出たものを植えてみる、勝手に生えてきた何かの芽を植え替えて育ててみるといった、ちょっと変わった畑作業もありました。もともと農家だった高齢の参加者もいて、野菜の育て方、農業のお話を聞くこともできます。

● 木工作業

集めてきた廃材でベンチや作業台を作ったり、四角や三角の木片を紙ヤスリで磨いて積み木を作る、板を磨いて削って看板を作る、リヤカーに薪ストーブやカウンターを取り付けて調理移動車？に改造するなどのいろいろな作業がありました。廃業した刷毛屋さんから譲ってもらった刷毛の柄が沢山あり、柄を使って何かを作るといったことにも挑戦していました。

● 他にもいろいろ

廃材を燃料にした薪ストーブでお湯を沸かしたり、落葉樹などの植栽による循環型の庭造りなど、グラウンドのあっちこっちに人が集まってなにか作業していました。

参加してみて

特に誰かが決めた課題や期限はないので、自由な雰囲気が漂っていました。私は木工作業で気づけば黙々と板を磨いて木くずの山をつくっていました。ふらっと寄ってみたら面白いかもしれません。

レポート：沖田一志

ブレーカープロジェクトとは

2003年にスタートした大阪市の芸術文化創造事業として、独自の表現手段を開拓するアーティストとともに西成区を拠点に継続した活動を展開する地域密着型のアートプロジェクトです。

ブレーカープロジェクト　作業場

場所：旧今宮小学校（大阪市西成区天下茶屋1の16の5）
開催日時：次回7月28日午後3時～5時30分（今宮あいあい祭と同時開催のため）
通常午後1時～4時30分（月に1～2回程度、HPで事前告知）
参加費：無料／途中参加・退出OK
E-mail：info@breakerproject.net

[沖田一志] 車で移動中の出来事、油断すると何度もエンジンが停止。交差点や踏切でドキドキでした。最近の車でエンストに遭遇することがないのでパニックになりました。車は長期入院中です。

[佐々木敏明]
緑なす葉脈の脈透きとおる
紫陽花やまだ咲かぬ旅恋の途次
五月闇離宮太古の貌を見せ

[田岡秀朋] 先日、伊藤真さんの講演を聞いた。憲法の三大原則は学校で教わったけど、立憲主義は学んでこなかったと実感。民主主義が時にアクセル、立憲主義がブレーキの言葉が印象に残った。

今月のお隣さん

孤立をおそれず、紙面でつなげる地域の輪

矢口 冨美男（やぐち ふみお）さん

普段は公営住宅の清掃・除草作業のお手伝いをしている矢口さん。子どもの頃から野球が大好きで、勤めていた会社の野球チームではキャッチャーを務めていました。そんな矢口さんは熱狂的な阪神ファン。最近は甲子園に出向く機会が少なくなって悔しそうにしています。その代わりカラオケ居酒屋では、もちろん「六甲おろし」を熱唱して応援しているそうです。今回は「生涯虎命の六甲おろし」なおとなりさんのご紹介でした。

たくやの ろくじょうふたま 畳間

ハナレバナレになった人とまち。
くらしの窓から、紡ぐヒントを探してみる。

しなやか

建物の骨組みに使う素材として、木よりも丈夫でコンクリートよりもリーズナブルな「鉄」がある。よくある鉄のイメージは硬くて重くてお高い。でも、建物の柱や梁など大きくて長い建材としてみると、鉄筋コンクリート造よりも鉄骨造の方が柔らかくて軽くて安い。

鉄の「柔らかさ」とはバネのような粘りがあるしなやかさのこと。厚みや大きさなどの量を抑えられるので、軽くて安くなる。とくに工場のように広い空間が必要な場所、風や地震で大きく揺れる高層の建築物ではその柔軟さが人を守るのに力を発揮する。

弱点といえば火に弱く一定の温度で〝グニャ〟っとひしゃげること。なので、火に強い素材で包み、火事のときには人が建物の外に逃げる時間を稼いでもらう。

木・コンクリート・鉄を並べると一長一短あり、やはり適材適所。長く使うものだから、手入れのし易さや環境への優しさ、まちの一部としての地域性や町並みへの配慮、こうした素材選びを通して見慣れ使い慣れたタテモノを考えると奥が深い。

（安田拓也）

赤いサビ止めをまとった鉄骨の骨組み

[寺島史視] ゆ～とあいで第３回カラオケ大会が開催された。前回よりも参加者や観覧者も増えてきた。これからも大盛況になるようにもう一度話し合い見直し考えていこう。

[谷口円] 先週、給湯器が壊れてお湯が出なくなりました。お風呂に入らない訳にもいかないので水で髪を洗ったりするのですが、まだまだ寒い…。でもまぁ、ある意味「生きてる感」は感じます。

お風呂やさん ものがたり

『西成区　銭湯』と検索すると、20件以上がヒットする。その数は他の地域と比べても群をぬいていて、「西成は銭湯多いなぁ」という声をよく聞く。そこで、それぞれの銭湯の特徴やオーナーのこだわり、歴史などを取材し、西成区の銭湯の魅力に迫っていく。少し銭湯に行きたくなるコーナー。

四軒目　宝温泉

西天下茶屋駅から徒歩6分にある銭湯。主湯、子ども風呂、露天風呂、電気風呂、超音波気泡薬風呂、ラドンスチームサウナ、サウナ、水風呂といった多くの種類がある。

露天風呂は露天の外気に触れながら、ゆったりと寛いで入浴が楽しめる。また、じっくりと半身浴するとより効果的で、風流溢れるお風呂情緒を堪能することができる。

「お風呂屋さんものがたり」第4回は宝温泉の代表、北孝平さんにお話をうかがった。

北さんは2代目で、1989年の改修工事で今の宝温泉に生まれ変わるとともに、屋号と店主を引き継いだそうだ。初代は石川県で農家を営んでいたが、東京オリンピックの時に来阪し、親戚の風呂屋さんから2、3軒紹介してもらい今の宝温泉に決まった。

利用客数をうかがうと、ピーク時には一日平均500～600人ととても多かったが、今では、100～200人以下。

年齢は平均50歳代が多く、男女比は半々。利用時間は夕方までが多く、それ以降はまばらである。夜になると人通りも少なくなるので、24時までの営業時間を短縮した。スーパー銭湯やデイサービスの利用、子育て世代の減少が主な理由だそうだ。北さんは「子どもの人数も減り、無料サービスも今はしていない。年一回、地域の小学校が社会見学で来るので、これを機に多くの子どもたちにも温泉の気持ちよさを味わってもらいたい」と語った。

他にも気をつけていることや心配なことをうかがった。利用客の年齢層が高いため、長湯されていると「しんどならんか」「倒れないか」と心配になる。「利用客が1日1日無事に帰れるか、また来てくれるか、喜んでくれるか、気にしていますよ」と語る。色々なことを気にかけてくれる北さんがいるので、利用客は安心して過ごせるのだと感じた。

ここで、宝温泉ならではのお風呂紹介。冒頭でふれた「ラドンスチーム」とは、ラドンを使用した多湿型のサウナのことで、西欧諸国では医療温泉として使用されている。日本でも昔からあるそうで、マイナスイオンを放出し、水風呂と併用入浴するとより高い効果が期待できる。血管を活性化し、血流の流れが良くなる。よく知られている乾燥式サウナが苦手な方にも楽しんでもらえるはず。

これ以外にも健康に良いお風呂がまだまだあるので、健康づくりのために足を運んでみてはどうだろう。

住所：西成区梅南3丁目2の41
電話：06-6651-5695
営業時間：午後2時～午後11時30分
定休日：毎週木曜日
料金：大人440円・中学生300円・小学生150円・幼児60円

[安田拓也]1979年初版『子どもの文化人類学』「切るとか割るという行為が〝創る〟ことに繋がることを教えなくなってきているのでは？」という問い。読み易く今も示唆に富む本でした。

[西田吉志] 昔から電車に乗るのがほんとに苦手です。普段乗らないから東京へ行ったときはもう大変。でも、この前一人で東京へ行った時は迷わず電車を乗り継げた。案内表示がわかりやすくなったのかな？

エルカレ通信

ぷらすアルファ

「社会を知って」「社会に踏み出す」
そんなL's College Plusの取り組みを
紹介していきます。

vol.3

様々な仕事の現場を見て

『ゆ～とあい』にやってきてちょうど１ヶ月が経った５月２日。新３年生は、施設外学習として河内長野市にある長野公園に行ってきました。目的は、長野公園の空を泳ぐ、自分たちがデザイン、色付けしたこいのぼりを見に行くことと、公園のしごとについて学ぶこと。公園スタッフのみなさんの協力で、直接、話を聞く機会もいただきました。楽しいだけの野外活動ではなく、現場での“学びをプラス”しています。

翌月の６月６日は大阪ガスへの企業見学。みんなで話し合い、授業で学んだ『クールビズ』をテーマに、その場に相応しい装いで向かいました。文化財であるガスビルの内部を案内していただきながら、ガスを仕入れて家庭に届くまでには、どんな仕事があり、どんな人々が関わっているのかを学びました。ちょっと緊張した企業見学ですが、ここでは“楽しみをプラス”。社員食堂での昼食や大阪ガス主催の御堂筋バザーへ行き、家族へのお土産を選んだり、それぞれが思い思いに買い物を楽しみました。

色々な所にある、色々な仕事を学び、その一端を目の当たりにしたこの春。２日間とも快晴とはいえませんでしたが、夏以降の実習に向けて思いを強くしました。

文責：手塚　誠

皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちで皮算用していることを語っていくよ。

５月26日に「わが町にしなり子育てねっと」主催の「子ども元気まつり」が行われた。2004年から「ねっと」が主催して以来、今年で15回を数える元気まつりは、近所の長橋公園が会場になった。長橋小学校の生徒数も年々少なくなる状況のもと、「ゆ～とあい」の取り組みとも重なったので、子どもたちの集まり具合を心配したが、校区外からの親子連れの参加者もあり大盛況だった。

西成区長も会場に駆けつけてくれた。そのおかげで「民間が主催する区の年間行事」といった観もあるくらい。公の主催であれ民の主催であれ、「すべては子どもたちのために」という区が掲げる思いに賛同して多くの大人が関わる、こうしたイベントが催されるのは良いことだ。

私たちの隣保館「ゆ～とあい」も西成区という町で、地元をはじめ、社会問題を考える多くのＮＰＯや仲間とともに、子どもからお年寄りまで様々な立場の人の暮らしを支援できるネットワークを構築できるように考えたい。そろそろパーツが揃ってきたかな。

（寺本良弘）

いい湯かげん

この事業がずっと続くために

５月６月は、ボクが役員を務める法人の決算理事会シーズンだった。非営利法人が大半だが、どの法人も経営環境は厳しく、持続可能な経営体制の整備がテーマとなった。随分身内の話になるが、議論の一端を紹介したい。

国際障害者交流センターを運営するビッグ・アイ共働機構は、厚労省からの委託事業費の激減に直面し、障害者のアート支援事業を他法人との連携事業に移行した。持続性を担保するための賢明な判断だと思うが、手塩にかけた事業を手放すかの寂しさもある。㈱ナイスは、施設及びホテル管理とレストラン運営を受け持っているが、夜間の断続労働の適正化など、人件費増嵩に直面している。国の施設なんだが、「安定の中の不安定」とでも言うべき葛藤がある。ただ、このセンターは、有識者や障害当事者の事業評価システムがしっかりしているのが救いである。

Ａダッシュワーク創造館を運営する有限責任事業組合（ＬＬＰ）は、大阪府と大阪市の補助金がゼロになり、国の地域職業訓練センター事業も廃止された中で、民間法人でこれを再生、10年間持続し続けている。ここの問題は、実施事業そのものは公共や民間からの単年度の委託事業で、どうしても増減があるのだが、土地と施設は無期限同額負担という、いわば「安定の上に不安定」が乗っかって「ねじれている」ことである。それなら、大阪市有の土地、国譲渡の施設でないところで事業をやったら良かったのにと言われるが、Ａダッシュという20年来の施設は利用者に熟知されたポテンシャルがあった。そこに「新たな公共」を試みたのがＬＬＰだった。

障害者雇用の事業協同組合エル・チャレンジの関連３法人の理事会は、相対的に「穏やか」だったが、ここでも持続可能性が議題となった。ここの特徴は自治体からの随意契約による就労支援の受託と、雇用先を確保するための総合評価入札（それを担保している大阪府の「行政の福祉化」施策）にあるが、これを大阪府社会福祉審議会から「行政の福祉化の条例化」で持続可能なシステムにすべきという提言をいただいたのは朗報であった。問題は、府議会の合意に至るかである。いわば「安定のための挑戦」の時を迎えているのだから、穏やかでも緊張感が走った。

㈱ナイスの課題は、ある意味身の丈以上の住宅建設融資を受けているのだが、それは「甲斐性」で良いのだが、その分返済の利子負担が重荷になっている。まちづくり会社なのに、新たな事業展開が停滞している遠因にもなっている。㈱ナイスの進路に係わる、いわば「安定のための脱皮」を構想する時だと思う。

４社４様の課題を抱えた理事会を終え、ボクは、㈱ナイスの代表を辞した。それぞれの法人が持続可能な事業体へと発展できるか、その動向から目が離せない。

冨田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

［若松司］なんでだろうか。文章をつくろうとすると、必ずどこかのタイミングで手書きしたくなる。と、なんだか小さなブレイクスルーがやってくる。身体の動かし方がちがうんだろうな。

［山村裕太］久しぶりに歯医者に行き、あの独特のにおいを思いだしました。臭いわけではないけど、あの匂いでテンションが下がるのは僕だけではないはず。

地域の縁を心でつなぐ

松向寺さんの心の時間

先日、檀家様が突然の病気で入院手術をされました。日頃から健康が何よりもありがたいと話し合っていたので、気落ちしていないかと心配しました。しかし退院後にお会いしたおり、「入院したおかげで、大切なことに気づき、貴重な時間を過ごしました。」と笑顔で言われました。

ふと「人生は、思いどおりにならないことの中に大切な宝が隠れているから、思いどおりにならないことを大切にしなさい」と教わったことを思い出し、大切な「時間」は、健康のときだけではなく病気のときにも頂けることを学びました。

江戸時代の良寛さんは「災難に遭う時節には災難に遭うがよく候、死ぬ時節には死ぬがよく候、是はこれ災難をのがるる妙法にて候」という有名な言葉を残しています。災難には遭いたくないですが、遭わざるをえないときが必ずきます。そのとき、嘆き悲しむだけでなく事実を受け止め、最善の「時間」を歩もうとすれば、災難も貴重な「時間」になるのです。

松向寺　通法

COUNT 2.99

隣保館などで事業を行う中で感じたことをつぶやいて、西成のまちづくりに役立てていきます！

なび編集長 寺嶋公典

たかが野球、されど野球を父から学ぶ

毎年恒例になってしまったが、今年も５月の最後の日曜日に父親と阪神ＶＳ巨人を甲子園に見に行った。巨人ファンの父の希望で巨人ファンが固まっているレフトスタンドの席で観戦した。

試合は巨人のトップバッターが二塁打を打った後に、まさかの盗塁失敗。それをきっかけにエラーと凡打を繰り返し、巨人は全くいいところがなく、終盤を迎えた。そして、７回裏にエラーで０対５になった時点で父の堪忍袋の緒が切れたのか、真っ赤な顔をして「帰ろうか！」と席を立った。長嶋・王と同世代で熱狂的な巨人ファンであった父は、ふがいない巨人を許せなかったみたいだ。球場を後にする際、怒りながらコップをゴミ箱に叩きつけた人もいた。野球でそこまで怒る人がまだいたことにびっくりした。

ただ、それほど熱を持っていることが自分にないことにも気づいた。地域の学力が低い、生活困窮者が多いことに対して、怒りを持って取り組まないと本気だと感じてもらえないんやろうな…。

ゆ～とあい

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆ～とあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび 7月号（vol.137）
発行日：2018年 7月 1日（創刊日：2007年 1月 1日）
発行：株式会社ナイス
住所：大阪市西成区長橋 3-6-33
電話：06-6563-1156
E-mail:info@nice.ne.jp
url:http://www.nice.ne.jp/

編集長：寺嶋公典
編集：沖田一志、佐々木敏明、田岡秀朋、寺島史視、西田吉志、安田拓也、山村裕太、若松司（あいうえお順）
イラスト：hidarimaki　デザイン：谷口円

facebook
facebook：https://www.facebook.com/navi.nishinari/